

1 学校教育目標

【教育目標】  
よりよい未来を共に創る人間の育成

【目指す子ども像】

本質を見極めようとする子(ねばり強く考える子) 多様性を尊重し、協働できる子(自他を大切にできる子) 社会との絆を深める子(地域に愛される子)

2 現状分析（前年度の評価と課題を踏まえて）

- (1) 学力の向上  
「well-being につながる学びの実現」という研究主題のもと、「主体的・対話的で深い学び」のある授業を実践することを通して、今、求められる資質・能力の育成に努めることが課題である。また、家庭学習の充実に向けての工夫や家庭への啓発が課題である。
- (2) 心の教育の推進  
道徳科の授業や学校行事等を通じた心の教育に全校をあげて取り組んでいる。日常の学校生活や公共の場での態度の価値付けを通じた集団づくり、他者を思いやる言動、情報モラルの向上が課題である。
- (3) 健康・安全と体力の向上  
望ましい生活習慣の確立や交通安全の意識の向上、適度な運動による体力の向上が課題である。家庭への啓発の強化や大学や地域人材の活用等、家庭と連携した取組を一層推進していくことが課題である。
- (4) 学部・保護者・地域との連携の強化  
教育実習を通して学部学生の育成に努めるとともに、研究発表大会に向けて授業づくりの研究やGIGAスクール構想の一層の充実が課題である。  
メール配信・web による保護者・地域への情報発信に努めるとともに、学校行事、PTA 活動、参観日等の機会を通して保護者同士のつながりを一層強めることが課題である。  
総合的な学習の時間や特別活動を中心とした地域連携のあり方や、学校運営への児童生徒の参画についての取組を進めていくことが課題である。
- (5) 業務改善の推進  
研究発表大会に向けて様々な準備のための業務が増加することが予想されるが、限られた時間の中で成果を出していくことが課題である。また、各種の会議は効率よく行い、中学校においては部活動改革を進めていくことが喫緊の課題である。

3 本年度重点を置いてめざす成果・特色、取り組むべき課題

- 地域社会の一員として子どもが自らの学びを創造する中で、思考・判断・表現できる小中一貫教育の推進。【知性】
- 地域社会の一員としての自覚を育てるとともに、受容し共感することのできる温かい心の醸成。【自己】
- 地域社会の一員として、地域とともに学校課題の改善に邁進できる開かれた学校づくり。【共生】

4 自己評価

評価領域	重点目標	課題解決に向けての取組(具体的方策)	評価基準	達成度	達成状況の診断・分析
学力の向上	思考力・判断力・表現力を確かなものにする学びの推進(情報端末活用)	○ 主体的・対話的で深い学びについての実践の充実と情報発信 ○ 子どもに育む資質・能力に特化したカリキュラムの深化充実 ○ 個の特性に応じた指導改善	子ども・保護者アンケート(授業関連)の肯定的な回答 4(95%以上), 3(90%以上), 2(85%以上), 1(85%未満)	4	〈生徒 99、保護者 90%〉 ・well-beingにつながるエージェンシーを重視した授業を行うことで生徒も自信をもって授業に臨んでいる。今後も組織的に学力向上を進めていくこととする。
	自ら学び続けることのできる家庭学習の在り方についての提案と実践(情報端末活用)	○ 各学年の課題に応じた家庭学習方法の実践と検証 ○ 子どもに育む資質・能力に応じた家庭学習方法の実践と検証	保護者アンケート(家庭学習・学力)の肯定的な回答 4(80%以上), 3(75%以上), 2(70%以上), 1(70%未満)	3	〈保護者 75%〉 ・生徒は8割が肯定的に評価しているが保護者はそこまで至っていない。家庭学習の詳しい取組調査の実施と学校との綿密な連携が必要である。
心の教育の推進	自他を大切にできる受容的な集団の醸成	○ 道徳科の授業づくりを通じた、子どもの変容の見取りと評価 ○ 学校行事への主体的な取組を通じた集団づくり	子ども・保護者・教職員アンケート(道徳科)の肯定的な回答 4(95%以上), 3(90%以上), 2(85%以上), 1(85%未満)	3	〈生徒 90、保護者 89、教職員 88%〉 ・学年ごとに綿密な打ち合わせを行い工夫した道徳科の授業が行われた。附中祭等の体験から互いを認め合う集団づくりがなされた。
	集団意識を基盤とし、自治と誇りを基軸としたマナーアップ	○ 登下校中や公共の場での態度の価値付けを通じた、望ましい集団づくり ○ 子どもの自治的な工夫・改善を通じた主体的な取組の推進	子ども・保護者・教職員アンケート(規範)の肯定的な回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	4	〈生徒 97、保護者 99、教職員 83%〉 ・ほとんどの生徒が公共の場において礼儀正しくマナーを守って生活している。
健康・安全と体力の向上	自らの生活の課題を意識し、工夫しようとする意欲・態度の育成	○ 本校の実態に即した、早寝・早起き・朝ご飯の啓発、食育指導、保健指導、ネット利用の指導を通じた、健康的な生活習慣や態度の育成	子ども・保護者アンケート(生活)の肯定的な回答 4(80%以上), 3(75%以上), 2(70%以上), 1(70%未満)	3	〈生徒 81、保護者 72%〉 ・概ね健康的な生活を送っているが、情報モラルについては機器の不適切な使用等もあり家庭と連携しながら厳しい対応が必要である。
	安全に楽しく運動を楽しめる資質・能力の向上	○ 運動場を捉えた具体的な安全指導の充実 ○ 体育科の授業や家庭生活での実践を通じた体力の向上	子ども・保護者アンケート(生活)の肯定的な回答 4(80%以上), 3(75%以上), 2(70%以上), 1(70%未満)	3	〈生徒 79、保護者 73%〉 ・個人差はあるものの保健体育の授業やクラスマッチ等の体育的行事を通して体力の向上に努めた。
学部・保護者・地域との連携	学校と学部との連携を密にした教育研究の推進	○ 9年間を見通した定期的な情報提供及び教育実践研究サイクルの構築	教職員アンケート(学部連携)の肯定的な回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	1	〈教職員 53%〉 ・小中一貫教育研究発表大会や教育実習を通して様々な指導助言をいただくとともに行事等においても連携した場面が増えた。
	学校と保護者、保護者と保護者のネットワークづくり	○ 学校webページを活用した各種情報発信の充実 ○ 非常災害等、学校の危機管理に関する共通理解と訓練の充実 ○ PTA、おやじの会への参加を通じた保護者同士の絆づくり	保護者アンケート(PTA等) 4(85%以上), 3(80%以上), 2(75%以上), 1(75%未満)	2	〈保護者 情報発信 95%、非常災害等 80%、つながり 60%〉 ・情報発信、非常時の理解については肯定的な捉えだが、コロナで途絶えた保護者同士のつながりは改善しつつある。
	附属学校の特性を生かした地域とともにある学校づくり	○ 学校運営協議会、子どもとの熟議を通じたCS(コミュニティ・スクール)の充実 ○ 附属学校の特性を生かしたCS(コミュニティ・スクール)機能の強化	4(子どもが参画した地域との取組), 3(子どもが参画した学校運営協議会との活動), 2(学校運営協議会の提案による新たな取組), 1(学校運営協議会での熟議)	2	・総合的な学習において光市のみならず幅広く地域と連携した学びができた。児童生徒が学校運営協議会に出席し制服について協議したことは大きな成果といえる。
業務改善	業務の見直しと効率化を通じた働き方の改善	○ 限られた時間内での子どもと向き合う時間の質の向上 ○ 小中の同僚性の向上、業務や学校行事の見直しによる業務の効率化	時間外労働時間の平均 4(42時間未満), 3(47時間未満), 2(52時間未満), 1(52時間以上)	1	〈時間外労働時間の平均 54時間〉 ・昨年度は時間外労働の平均が64時間であったが今年度は54時間に減少した。変形労働をいかに改善にむけて前進しつつある。

5 学校関係者評価

取組状況に関する意見・要望等	評価
・生徒・保護者ともに大変高い評価である。授業を拝見して大変良い雰囲気を感じられた。	4
・改善はみられるがタブレット端末の活用とともに家庭と連携が課題である。	3
・道徳の授業を通して生徒の心が育つよう今後も工夫してほしい。	4
・礼儀正しくきちんと生活している。交通マナーなど改善がみられる。	4
・情報モラルについては学校の定期的な指導と機器のチェック、家庭の理解力と指導力が不可欠である。	3
・部活動の地域移行が進むなかで地域と一体となった体力づくりがすすむとよい。	3
・本年度は研究発表大会が開催され連携が深まったようであるが、附属学校として日常の連携を工夫できないものか。	2
・室積保育園との合同避難訓練の実施やPTAボランティアの参加など地域・保護者の連携がすすんだ。	3
・広範囲から通学しているため地域に密着することは難しいが挨拶など身近なところからすすめると良いだろう。	3
・良質な教育活動をすすめるために業務改善をいっそうすすめてほしい。	2

5 学校評価の総括（取組の成果・次年度への改善策）

〈取組の成果〉  
・各教科ともに「主体的・対話的で深い学び」のある工夫した授業づくりがなされ生徒は自分たちの学校の授業に誇りと自信を抱いている。今年度は「well-being につながる学びの実現」という研究主題を掲げ11月には研究発表大会を参集する形で実施し、県内外から多くの参加者を迎えることができた。附中祭や参観日などの学校行事は制限することなく実施し、特に全校合唱の取組を通して生徒の心を醸成することができた。  
・大学と教育実習や研究活動を通して連携を深めるとともに、弦楽部・合奏班と山大吹奏楽部との合同演奏や落語クラブと山大落語研究会との合同公演などの特色ある取組が実施できた。  
・今年度も下校時の見守り、図書整備、附中祭、研究発表大会に多くの保護者の協力を得ることができた。評価アンケートにおいては6割の保護者が、保護者同士のつながりを肯定的に捉えている。また、本校は広範囲から生徒が登校してくるため、地元とのつながりを結びにくい面があるが、光市や室積地区にとどまらず幅広い範囲の地域との連携を学びに生かした取組がなされ、附属学校の特性を生かした地域とともにある学校づくりをすすめることができた。

〈次年度への改善策〉  
・義務教育学校への移行に備え小中教職員の組織再編や小中教員による授業交流、学校行事の共同実施など小中一体となった教育活動の推進にいっそう取り組んでいくこととする。  
・生徒の情報機器の扱いや情報モラルの育成に課題がある。情報機器の不適切使用については厳格に指導するとともに家庭と連携し、意識の向上を図る取組を実施する。  
・国立大学教育学部附属学校としての特色をいかに大学と連携をいっそう強めるとともに、地域連携においても総合的な学習の時間を中心に幅広い地域との連携を創出していく。  
・年間を通して17時総下校を実施し、勤務時間内にすべての教育活動を終えることで教職員の働き方の改善にいっそう努めることとする。

